【ポスター発表】

共生社会はいかにあるべきと見なされているのか

－障害者週間のポスターの分析から－

○　北星学園大学大学院博士後期課程　　堀内　浩（会員番号 007352）

キーワード：共生社会，障害者週間，質的研究

１．研 究 目 的

本論では，障害者週間の障害者のポスターを分析することにより，障害や障害者がどのように見られているのかについて，その記述のパターンを明示することを目的とする．障害者は歴史的に，社会において弱者として固定化され無力化され続けている．こうした史的事実から，現在の健常者中心社会において受動的な立場に位置付けられている障害者が実際にどのように記述され位置付けられているのか，について明確にすることは重要であると言える．というのは，それは障害者の実際の不利益構築性や無力化の産出について明確にすることと同様のことだからである．

２．研究の視点および方法

本論では，2006 年から 2011 年までの 6 年間に入賞している約 80 枚の障害者週間のポスターを分析することにより，それらの記述に共通している特徴を明確にする．それにより，障害者週間のテーマである共生社会の概念や，作品の審査員，書き手などによる障害の記述を明示する．

３．倫理的配慮

本研究は，日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守して行われた．

４．研 究 結 果

研究結果として，障害者ポスターの特徴は大きく以下の 4 つに分類できた．

さて，障害者が描かれたポスターを一瞥して分かることは，まず，1）車椅子に乗った身体障害者と視覚障害者が描かれていることが特に多い（身体:42 枚，視覚:15 枚），ということである．それは，障害種別の特徴として，明らかに目に見えて分かりやすいからであると考えられる．つまり，知的障害，精神障害，発達障害などと比較して，身体障害や視覚障害はその特徴が明確に分かるということである．それは例えば，車椅子に乗っていることや白杖の所持，そして，盲導犬を同伴していることなどである．前者は後者の障害種別より，明らかにポスターとして描くことに困難を覚えるだろう．障害者ポスターのモチーフになるということは，障害者であると分かりやすいということであって，それは描

きやすい，描かれやすいということでもある．結局，障害者を絵にできるということは，絵にすべき，絵にする価値があるという規範や理解を提示していると言える．

また，2) ポスターに書き手のメッセージであるように見える文字が書かれているものも数多くある（文字:15 枚）．例えば，徒競走を行うためにスポーツ義足を使用しながら，スタートの構えを行う障害者の上部に「挑戦」と大きく書かれているものがある（2008 年度作品）．これは，障害者にとってスポーツは「挑戦」であり，大変な苦労を伴うものであるという価値付けを行っている．もし，健常者であれば一般的には徒競走を行うこと自体はおおむね「挑戦」にはならず，感動的ではないため全く絵にならないのである．

さらに，3) 健常者と障害者が一緒になって手などを取り合いながら笑い合っている場面もまた数多く描かれる．例えば，一人の車椅子の障害者を健常者が輪になって取り囲んでいる作品（2006 年度作品）においては，障害者は健常者と良い関係を形成して上手くやっていくような関係が好ましい，という書き手の期待を見ることができる．その一方で，この作品では障害者は現在の社会における多数派としての立場である健常者に，その特性を善意から理解され仲良くやっていくべき存在として位置付ける，同化的な意味をも内包している．つまり，少数派の立場に立つ優しい多数派は掛け値なしに絵になるのである．

加えて,4)野外で課外活動などを行っている障害者が多く描かれるといった特徴もある．地域のお祭りに参加して踊っている姿（2008 年度作品）や，学校の運動会において校庭で友人と一緒に応援する車椅子の障害者（2006 年度作品）は，障害者でも外出が可能で色々な活動ができるという価値を提示している．こうした姿がポスターとして描かれるのは，障害者の外出という行為が，健常者のそれと異なった意味を持っているからである．障害者の外出は,介助が必要であったり物理的な段差などの環境的バリアが存在しているため，一般的に困難が伴うとされる．そのため，障害者の外出は特別な行為としてここでは位置付けられている．そのため，健常者の外出は重要な意味付けをされない一方で，障害者のそれは珍しいという論理によってポスターのモチーフとして選好されているのである．

5. 考 察

結論として，障害者ポスターでは，健常者の規範を逸脱しない障害種別や障害者を健常者がモチーフとして選択する，そして障害者に相応しくない珍しいとされる場面，文字通り絵になるような場面を描かれるという特徴が,一定の記述のパターンとして認められた．つまりそれは，既存の障害者概念を再生産し，健常者の規範に沿った同化的な内容のものが好まれるということでもある．こうした研究結果を，障害者週間の趣旨である障害や障害者への理解促進やどのような属性の人間とも共生していくといった共生社会の概念と比較した場合には,共生というには限定的で選別的,慈善的,そして支配的であると言える．